

樹木の世代交代を

植栽委員 小暮泰寛

錦秋、鐘の鳴る広場のモミジバフウが赤や黄、褐色に装い、イチヨウが黄色い葉を纏うシーアイハイツ和光では、深山に行かなくても居ながらにして紅葉黄葉を楽しむことができました。一方、春から初夏にかけては、サツキやアジサイなどの美しい花に彩られ、季節の移ろいを感じることができます。

かつて、6月の梅雨時に団地の敷地全域に咲くアジサイは、淡い青色から濃い紫色まで花の色も多彩で、実に見事なものでした。紫陽花寺として知られる、鎌倉の明月院や成就院に勝るとも劣らない美しさでした。その美しい植栽を復活させるためには、きめ細かく丁寧な管理が必要です。

例えばアジサイは、丈を縮める剪定を施す際、せっかく付けた来年の花芽まで茎ごとばっさり切り落としかねません。そのためアジサイの剪定は2年か3年に1度とし、その間の年は、美しく花を咲かせて美観を楽しんでもよいと思います。花の時期が過ぎたら、花殻を摘む手入れは欠かせませんが。

竣工時には埼玉県初の景観賞に輝いたシーアイハイツ和光ですが、築35年を経て、残念ながら植栽の美観が年々劣化していることは否めないのではないのでしょうか？ 植栽の管理について丁寧に考える時期が来ていると思います。

今、膨らむ剪定費用を抑えるために、大きく成長し茂り過ぎた樹木の数を減らす管理計画が進行中で、8年前には1277本あった高木(高さ3m以上の樹木)が、400本伐採され、現在は800本台になっています。しかし、伐採に偏った実施内容で、伐採跡地に適切な処置がされず、切り株はそのまま放置され、足元のサツキツツジなどの寄せ植えは枯れて露地になってしまった箇所も多く、美観が損なわれています。

築後90年の2072年には建物を建て直すこと

が考えられているそうです。その際には、敷地全体の再設計を行い、植栽も全面的に計画し直すことになると思われますが、それまでまだ55年あります。その間は基本的には現在の植栽レイアウトを維持するとしたら、2027年を中間の折り返し地点と考えて、ここでいったん踏みとどまり、植栽の大幅な若返りを図る必要があるのではないのでしょうか？

今後55年間、このままひたすら伐採と強剪定を続けていくのではなく、大きくなりすぎた樹木を伐採ではなく伐根し、団地竣工時のような若くて小ぶりな樹木に10年かけて順次植え替えていくのです。つまり、樹木の世代交代です。

その際、1本立ちの樹木ではなく、株立ち(かぶだち)の手法を取り入れるのも有効だと思われます。

株立ちとは、根元から複数の幹が分かれて立ち上がる形です。1本立ちに比べると幹は細く、軽やかな印象ですが、1本の樹木で何本もの幹が重なり、ボリューム感や自然の野趣を感じさせられます。そのうえ、大木になりにくく高さを抑えることができる方法です。カツラやヤマボウシ、シマトネリコやソヨゴなど株立ちに適した樹木も多々ありそうです。

原始、人類の祖先は森で暮らしていたという説があります。木の枝に掴まって立つことから直立歩行が始まったというのです。なるほど、私たち日本列島の縄文人は豊かな森の恵みを得て暮らす、森の民だったに違いありません。樹木に包まれたシーアイハイツ和光に帰宅すると、まるで森の中に帰ってきたような安らぎを覚えるのは、縄文の昔から伝わってきた私たちのDNAのせいなのかも知れません。

その緑を大切に、丁寧に維持していきたいと思います。緑の樹木は私たちシーアイハイツ和光の財産、環境資産なのですから。

